# 空にツギハギ

七浦彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空にツギハギ

【Ｎコード】
Ｎ５１４３Ａ

【作者名】
七浦彩

【あらすじ】
生まれたばかりの赤ん坊が考えていることって…

だいたいこの世っていうのはどうしようもなくできているんだろうなあと思ってしまう。そう、例えばこの空を見てみなよ。どうにも真っ青で涼しげなくせに、この日差しはどういうもんだろうね？
雲がだだっと渡っていくのはね、実に爽快な感じなんだけれどね。切り取られた世界にたった一人になってしまったような、そんな寂しささえ感じさせてくれてしまうんだよね。
ああ、こんなことを語っていたってしょうがないか。僕……このお話の語り手の名前は、まだない。生まれたばかりだもんで。そう、ぬるっとまさに生まれたて。新しくお母さんになってくれた人がよちよちーなんて言ってくれてるけれど、なんだかむずがゆくて仕方ない。だから不平を言うために雄叫びをあげてるような、そんな軟弱な存在だ。
僕の意識がまだ残っているということは、どこかの誰かさんがヘマをやらかしたに違いない。まあきっと、僕が育つにつれて僕の記憶はなくなってしまうのだろうけれど。ん、なんだかおかしな話だね。まあいいや。
僕が誰か？　今言ったじゃないか。生まれたての赤んぼだって。その前？　その前の話？　くだらない話だよ。それでも聞きたい？
それじゃあ少し話そうか。ちょうどベッドに戻る時間だしね。この新米ママさんは名残惜しそうだけれど。ああ、はいはいおやすみなちゃいママン。あいらびゅー。
おっと、すまないね。じゃあ続けようか。僕の死に方は、こんな感じだった。

痛い。痛い。もう死んじゃうよぅ。思ったらふわっと光が見えた。あん、これどうなってんのかな。ふむ、僕はどうやら車に轢き殺さ

れたみたいだ。ガタガタ震えて泣き出しそうな若いアジア系の男の顔だけ覚えている。その後彼がどうなったかなんてもちろん知ったこっちゃない。僕が覚えているのはそこまで。

記憶をぐっとさかのぼってみるとする。そもそも僕はどうしてこんな目に遭うことになったんだっけか。赤信号は守るようにしていたのだけれどね。

急いでる。髪の短いいい男が急ぎ足で歩道を走ってるのが見える。ああ、あれが僕だね。色男かどうかわからないって？　そりゃそうだ。僕の記憶は僕にしか見えないもの。赤んぼの前の僕はｓｕｐｅｒ色男。はい、この話はおしまい。

色男はなんで急いでいるんだろう。何かをぎゅっと握り締めているみたいだね。あれはなんだろう。右手の感触を思い出してみよう。堅い。なんだこりゃ。ああ、これは確か、恋人に渡すはずだったプレゼント。シルバーネックレスだったかな。確か裏にフォーエバーラブとか書いてあるやつだ。我がことながらまったくもってセンスのない。フォーエバーデブとかに書き換えてやりたいね。最高に笑えると思うけれど。どう？　不謹慎？　あっそ。

そもそもそのフォーエバーデブをどこで買ったんだっけ？　ああ、なんか場違いな店が見える。顔赤らめちゃって汗だくでまあ。色男、がんばれよ。ファイト一発だ。ん、店の名前が見える……エルメス？　こりゃまた大仕事に出たねえ。キヨミズの部隊から飛び降りるってやつかなあ。え、ディテールなんて気にしなくていいよ。僕何人なのかわかんないし。今も前も。

で、なんで場違いな店に入る羽目になってしまったんだっけな？

……あれ、この男そんないい仕事してるように見えないのに大金握り締めてら。どうやって手に入れたんだいこんなもの？

誰かが見える。泣いてる。中年の男と女。これが僕の前のママンとダディなのかねえ。ふん、今のママンには敵わないみたいに見えるけど。早くも子バカかあ。僕も地に落ちたもんだなあ。

どうして泣いてるんだ。そう、僕が永遠のお別れを言ったから。

なんで永遠のお別れなんて言わなくちゃならなくなったんだっけ？
そんな大層なことしたのかあ。それとも映画撮影かなんか？　有り得るなあ。なにせ僕色男だしな。うん。映画の撮影後に誤って、って感じかあ。そりゃあなさそうだな。
ええと、と考える。女の子が見えるなあ。泣いてる女の子。可愛い子だなあ。恋人にしたいくらいだよ。あれ、それともこの子がフォーエバーデブ、こほん、失敬。フォーエバーラブの相手なんだろうか。
もう無理だとかなんだとか。あなたにはついていけないとか。一方的に言われるがままになっている。
それもそのはずだ。彼は、彼女に会いに行く前に、盗みを働いたんだから。
小さな部屋が見える。整頓された部屋をがさがさ探っていて、大金を手にしていた。くるりと振り返る。倒れている。見覚えのある寝癖。
ああ、あれは僕が殺したんだった。なんで殺したんだっけ。そう、僕はこいつが嫌いだったんだ。
ずっとずっと嫌いだった。ハイスクール時代から。くだらない家柄を鼻にかけて、なんの努力もしないで楽ばかりしていたこいつ。
対して僕は両親のためにとバイトをして学費を稼いでいた。その頃ちょうど前のダディの会社が倒産したばっかりで。辛かった。
親戚のお古のカバン。流行を無視したカバン。あれを最初に笑ったのはこいつだった。それからずっと、僕はこいつが嫌いで、嫌いで。
最後の引き金を引いた一言は、なんだったか。思い出すのも腹立たしいけれど。
結局君はいつだって地べたを這いずり回っているだけなんだね。確か、そんな感じだったような気がするなあ。
そう、僕は事業に失敗して……お金が、お金が欲しくて。どうにかしなくちゃと慌てて、手紙を出した友人が、彼に用立てを頼んだ

んだった。
そして僕は彼を殺して。もう終わりだって思ったから、彼女の家に行った。その二日前にやらかした派手な喧嘩のささいなきっかけを、謝るために。そして自分が犯した罪を告白するために。
彼女と喧嘩したのは、僕のだらしなさに関してやれやれと言われたからだった。僕が悪かったのに、僕は彼女に対して怒鳴ってしまった。ああ、もう、忘れてしまいたい。腹が立つよ。自分に。
けれど彼女は鼻先でドアを閉めた。だから僕は両親のところへ行った。どうか僕のことは心配しないで。すぐに帰ってくるからって。

そうして、僕は大金のやり場所に困った。そうだ。どうせ自分はこれから刑務所に行く身なんだ。それなら彼女に一等綺麗なものを贈ってやろうと思ったんだった。盗んだお金で何をもらったって、嬉しいはずはないのにね。でも、きっと僕の頭は混乱していたんだろう。
その夜、ぱっと見上げた星はやたら綺麗で。自分の体が冷たくなるのを知りながら、僕はぶきっちょな女の子の縫ったつぎはぎみたいに並べられた星をぼぅっと見てた。
あの日見た星空が人生で一番綺麗だったなんて、笑い話にもなりやしないな。
あれは報いだったのかもしれない。人をたった少しのうらやみと一時の感情で殺めてしまった僕への。あの可愛らしい女の子を、くだらない自分のプライドで傷つけてしまったことへの。

あ、おかしな話につき合わせてしまったねえ。ね、君はどう思うかい？　人生なんてきっとぐるぐる回ってつぎはぎだらけできっと、そう、なんて言ったっけ、仏教の。カルマ、そうカルマみたいな。仏教徒じゃなかったからよくわからないけれど。
それでも僕は笑って泣いて怒って生きていくんだろうなあ。人を

うらやむこともあるだろうし、愛することもあるんだろう。ほら、もう早速隣の赤んぼがうるさくてイライラしてる自分を知っている。

人間なんてくだらないもんだねえ。でも人間であることを少し愛しく思ってしまうなあ。人殺しはよくないけれどねえ。

なんにせよ、また人間として生まれることができてよかったよ。もしかしたら僕の……あのバカな男のその後の人生を知ることが出来るかもしれない。フォーエバーラブは無事彼女の手に渡ったのか。あの両親は。

けれどもうあれは違う人間の人生だよなあ。どんなもんだと思う？　知らなくていいことまで知っちゃいそうだもんね。

取り敢えず今は新しいママンのミルクを心待ちにすることにするよ。その間に、こんな記憶なんて消えてしまうだろうから。消えてしまえばいい。

あんなバカ男が存在したという事実は、きっと消えないだろうけれどね。実際世界ってのはどうしようもなくできているんだと、そう思うよ。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5143a/

---

空にツギハギ

2010年10月8日15時29分発行